

平成28年度神戸短歌祭 (於)県民会館パルテホール

総会・講演「私から見た今日の歌」



第195号

題字 出口 草露
発行者 〒679-5322 佐用郡佐用町上石井685 安藤直彦方
兵庫県歌人クラブ
会計 〒657-0043 神戸市灘区大石東町4-3-1-305 福島妙子
振替 01110-5-6903
印刷所 ㈱ 甲南堂印刷

平成28年度 神戸短歌 兵庫県歌人クラブ



充実を目ざしたいと抱負を語る安藤代表

兵庫短歌賞
新人賞 野田かおりさん
森垣 岳さん
宮城 十子さん
遠藤 瑛子さん
武富 純一さん

神戸短歌祭は4月29日(祝)午後1時より県民会館パルテホールにて開催された。兵庫短歌賞・新人賞・奨励賞の表彰式と総会の後「私(編集者)から見た今日の歌」と題して及川(晋樹)隆彦氏による講演が行われた。

総合司会は山田恵子氏と山田麦氏の二人。開会宣言、安藤直彦代表の挨拶に続いて表彰式が行われた。

兵庫短歌賞には「桜が咲く頃、舟は」の野田かおり氏、新人賞には「無名と云う雲」の森垣岳氏と「鳶いろの髪」の宮城十子氏、奨励賞には「二脚の椅子」の遠藤瑛子氏と「空港三丁目」の武富純一氏が選ばれ、それぞれ安藤代表より賞状が授与された。受賞者各氏の喜びの言葉の後、選考委員を代表して尾崎まゆみ氏より選考経過の報告があり、応募33作品に対し慎重に審議された経過が述べられた。特に受賞作品はいずれもレベルが大変高く白熱した議論が交わされることが報告され、それぞれの作品への懇切な選評がなされた。又、選外の注目作品についても具体的に歌をとりあげながら心あたまる批評がなされた。

次に、議長に高井忠明氏を選出し、兵庫県歌人クラブ平成28年度総会が開催された。安藤代表より27年度事業報告。その中で幹事会に於て年会費改定案が決議されたことが報告され、理由説明の後その場で採決がとられ、改定は承認された。又、野瀬昭二氏の顧問就任も承認された。続いて福島妙子氏による会計決算報告と兼貞靖行氏による会計監査報告があり、全て承認された。今年度の役員は代表兼事務局長に安藤直彦氏、副代表に前田昭子氏と小林幹也氏、事務局次長に三津野幸代氏、会計に福島妙子氏、会計監査に兼貞靖行氏、新顧問に野瀬昭二氏。次いで、安藤代表より28年度事業計画の提案。本年度は歌人クラブ60周年に当たる。記念祝賀会を1月新年懇親会に併せて開きたい。



兵庫短歌賞受賞の野田かおりさん

記念事業にと会報縮刷版発行を検討してきたが購入希望者数が満たなかったため今回は断念。阪神淡路大震災時の震災詠の蒐集は今後も続けたい」と説明があり「昨年と同じ事業も会費改定を受けて今まで以上の充実を目指す」と決意が述べられた。提案は満場一致で承認された。

休憩後は講演会。司会は小林幹也副代表。講師紹介の後出版社主であり歌人である及川(晋樹)隆彦氏が「私から見た今日の歌」と題して語られた。今日の歌壇の種々の歌をとりあげ、背景などを交えて評された。広く深い情報を持たれている編集者ならではの豊かで味わい深い内容、穏やかな語り口に参加者は静かに聴き入った。終わりに、田中教子氏と武富純一氏より端的な質問がなされ、会場からも質問や感想が出された。前田昭子副代表の閉会の辞により、午後4時半すぎ散会。参加者は約100名。(山田 文)

(5) ページに記載

講演「私(編集者)から見た今日の歌」

及川(晋樹) 隆彦

司会 小林幹也

始めに司会の小林幹也副代表より講師の及川(晋樹)隆彦先生の紹介があった。及川先生は「短歌現代」編集長等を経て、昭和六十年にながらみ書房を設立、平成元年に月刊「短歌往来」を創刊、同二十五年に、歌集『浸蝕』で第十八回若山牧水賞を受賞。ながらみ書房社長、歌誌「心の花」選者でもある。これまでに『感傷賦』、『天心に帆』、『秘鑰』、『浸蝕』の四冊の歌集を出している。

講演は「私(編集者)から見た今日の歌」をテーマに、最近の歌人の作品を随意に俯瞰して、現代短歌の流れや表現や技巧の問題等に触れた広大な内容であったが、高ぶらず(筆名「晋樹」は街頭易者の命名だと明かして、冒頭から聴衆の心を掴んだ)、牧水の様に酒と旅にも折々触れ肩が凝らぬよう面白く、分かりやすく講演して頂いた。

・こなからは真綿のやうなやはらかき言葉、今夜もこなから飲みぬ
高野公彦 『流水』

数々の歌から酒好きと分かる。「小半」(二合五勺)、「玄水」(酒「玉盃」(玉で作った様なお椀「酒杯」)等、始めに難解な字を持って来て、作品に仕上げる技法である。
・葉、めがね、入歯、杖など老人は物で命を支へて生きる
高野公彦 同

名詞が目立つが、「物で命を支へて生きる」の視点に作者の思想が示されている。
・くぶくぶかふはふはかしんしんかわからねど水母は光る地吹雪の日も
米川千嘉子

擬態語、擬音語を上手に使って作品にしている。
「吹雪の水族館」
米川千嘉子

・加茂水族館出でて吹雪へ帰

りゆく人のからだは角度をもちて
米川千嘉子 同

水母は丸まった感じで角度が無い。対比させると人の「角度」が際立つ。
・強き雨遊ぶごとくに一日降るとんどんとんどんとんどんとん
伊藤一彦 『土と人と星』

作者も自分(及川先生、以下同)も七十歳を過ぎれば、雨の音も遊ぶ如くに楽しくなる。その姿をオノマトペを駆使して巧みに表現している。
・日常は日の常、月の常にして水の常なりと歌論を聞きき
伊藤一彦 同

「日常」という漠然たる概念を、「日」、「月」、「水」と自分の周辺の対象に投影させて感じ取っている。
・インタビュー受ける中学生

明石短歌会

明石公園内会議室
毎月第一・三木曜日

連絡先 田岡弘子

〒673-0845 明石市太寺四ノ一ノ三〇
☎(〇七八)九二二二六七三

淡路歌人クラブ

顧問 子務男 悦樹 子
代表・事務局長 荒来清水 悦樹 昭男 英陽 子
副代表 田田 英陽 子
会 計 島前 昭男 子
〒656-0651 南あわじ市伊加利1062
TEL・FAX (0799) 39-0835
清水 昭男

奥播磨短歌会

代表 寺尾榮禮

〒679-1201
多可郡多可町加美区豊部818
☎(0795) 35-0392

芦屋水甕短歌会

歌会 (PM1:30~4:00)
第2土曜日(芦屋市民会館)
第4金曜日(谷崎潤一郎記念館)

・連絡先 〒659-0026 芦屋市西蔵町6-22
☎(0797) 31-7220 藤井幸子方
・事務局 〒659-0012 芦屋市朝日ヶ丘町16-34
☎(0797) 31-5573 石井佳子方
近くの方の御参加歓迎します

「系ちうど」の会

代表 上田一成
☆個々の言葉を大切にす場
石田 勝啓 内海サチ子
小谷智聡子 寺田 紘子
志田 栄 菅野 仁孜
塚本 誠子 時里 直子
松田津也子 三木とし子
栗田 明代 山田 上根美也子
山之内順子
〒671-1211 姫路市勝原区熊見296-9
上田方 TEL・FAX (079) 236-6806

小野短歌会

松尾 鹿次

代表 坂田 豊志
副代表 阿尾日出子
会 計 藤井 久子

事務局
〒675-1371 小野市黒川町五七三
☎(〇七九四)六二二二八四六 松尾鹿次



穏やかに語りかける及川氏

はみな聡明に悲しきひとみ
を持って

小池 光 『思川の岸辺』
今の「中学生」は「聡明」
に見えるが、「悲しき」が象
徴する様に純粋な瞳でない。
社会からの孤立といった今日
の問題をも提起している。

・思川の河原を埋めし穂す
きはましろになりてわれを
いざなふ

小池 光 同

亡き妻を詠む一連の作品は
世代や立場によって良し悪し
の評価が分かれる。前衛派に
は好まれないであろう。創作
の中で「遊ぶ」、「試行する」
のは現代短歌の特徴でもある。
・東北をまだ見尽くさず白河

の関越えてより十年過ぎぬ

大口玲子

『桜の木にのぼる人』
能因法師の「都をば霞とと
もに立ちしかど秋風ぞ吹く白
河の関」が基である。法師が
現地には赴かず詠んだとの説も
あり、謎掛けの奥が深い。

・福島より来たりて宮崎の土
を指し「これはさははつても
いいの」と訊けり

大口玲子 同

福島原発の災禍を直截的に
批判するより、日常的な歌の
方がかえってリアルである。
尚、自分は震災の半月前か
ら喉が渴いた。地磁気や気圧
の変化によるのか？飲み物の
販売量の推移を調べれば、地
震が予知出来るかもしれない。

・住みながらこの国だんだん
遠くなるてんじんさまのほ
そみちのやう

馬場あき子

『記憶の森の時間』
日本が日本と違う国になっ
ていく気分が、「この国だん
だん遠くなる」で伝わる。

・バーの隅でひとり飲んで
ゐる吾れを憧れとしていま
だ果さず

馬場あき子 同

昭和には戸川昌子(推理作
家)、朝丘雪路(女優)とい
った「バーの隅でひとり飲
む」姿が決まる女性がいた。
有名歌人として行動を制約さ
れた作者の「憧れ」がある。

・この風はどこから吹きて来
るならむ土の匂ひに安らぎ
てをり

時田則雄 『みどりの卵』

作者は北海道で甜菜(砂糖
大根)の栽培等、農業を営む。
伊藤左千夫が故郷に戻り、
「九十九里の波の遠鳴り日の
ひかり青葉の村を一人来にけ
り」と詠んだように、「そこ
へ戻る」自然への回帰がある。
自分も九十九里浜が故郷で
あり、海岸を歩くとい調が整
う。少年期に経験した風と海
の香りに触発され、心身が若

海市短歌会

編集発行人 中川 昭

発行所

〒650-0027

神戸市中央区中町通三十一番十五

神戸コーポラス七〇一

☎(〇七八)三七一一〇三九九

神戸支部

〒653-0813

神戸市長田区宮川町
四一八―一三三三
明石多美子 方

薫風

発行人 平井 恭治

入会金・添削料 不要

月刊 会費月 1,700円

旧号 一部 500円

発行所は神戸市。
創立後半世紀が過ぎました。
歌はこころ。自然を愛し、
人を愛する仲間たちの集まりです。

発行所

〒651-0077 神戸市中央区日暮通4丁目1-7
(サニーコート日暮202号)

薫風社

TEL・FAX (078)221-0023

振替 01160-2-6567 薫風社

編集部 長谷川 正

神戸支社 長岡治子 播磨支社 西山寿美栄

宝塚支社 新家絹子 丹波支社 上本このえ

尼崎支社 濱恵美子 三田支社 雑賀実枝子

香寺短歌会

代表 岩田百合子

会計 井奥 弥生

連絡先

〒679-2151 姫路市香寺町香呂438

生田 よしえ

☎(079)232-4003

花鏡短歌会

石橋 妙子

〒658-0072 神戸市東灘区岡本2-10-3

TEL (078)441-3740

FAX (078)441-3744

一運営委員一

安藤 池本 登代子 成子
黒部 大久保 富美子
長岡 道子
中川 裕子
増井 定子
松田 三和子
木村 三和子
三津野 幸代
安田 千富美
山本 みさよ
吉矢 清子

コスモス藍の会

小野はつね 小野 幸恵 久保 崇子
久米川孝子 黒田 富栄 田中 恭子
林野千代美 福井 弘子 本位田米美
水野 美子 三宅 幸子 山本 元子
弓岡あき子

〒671-0121 高砂市北浜町牛舎三八八

久米川 孝子

返るからであろうか。

・父は大きなグロープだった
雨嵐 家族 哀楽 包んでみたぞ

時田則雄 同

小高賢にも同じ様な歌がある。「グロープ」自体を買って貰った記憶というよりは「グロープ」に父の包容力を投影させた郷愁の歌である。

・優先席に乗り合はせたる老人が老人に云ふとほきいくさ

渡 英子 『龍を眠らす』

「老人」が語らう様子に、仲睦まじさが良く現れている。

・息子の妻となるべき人が来てくれる三月のす糸余震はつつく

渡 英子 同

五年前の歌だが母親の「嬉しさ」と「不安」が伝わる。技巧でなく、素朴に思いを詠む。この様な表現法もある。

・中年の背びれそれぞれ丸めつつ並びぬるなり横丁の呑み屋

内藤 明 『虚空の橋』

この作者も酒好きである。「中年の背びれ」を「丸め」る視点が独創的である。

・身罷りし人と来たりて川べりの桜を見上ぐ今年のおさくら

内藤 明 同

「身罷りし人」とは父で、挽歌である。余情を切って詠むことで作品を仕上げている。

・すとんと穴にあなたが落ちてわたしいま百万円を出さねばならぬ

桂 保子 『天空の地図』

作者は兵庫県歌人クラブの会員でもあり、ながらみ書房から出された現代女性歌人叢書から引用した。

ここで作者の桂氏より「百万円は百万力の誤記」との訂正があったが、及川先生は、「百万円の方が断然面白い」とした上で「すとんと穴にあなたが落ちて」の口語発想でリアルさを増したと評価した。

・陸奥の地震の無惨が繰り返し映され疼ぐベッドサイドに

桂 保子 同

臨場感ある一首である。一連は三千首程あっても良い。

・病棟の廊下にひとすじさすひかりたぶんなれてはいけないところ

小川佳世子 『ゆきふる』

同じくながらみ書房の現代女性歌人叢書から引用した。ひらがなの多用で作品を生ききとさせている。不思議な技法である。

・風のせいばかりではなく揺れやまぬ今日のからだは木とは呼べない

小川佳世子 同

一種の擬人法である。木だつて揺れるが、今はそれどころではないという難病の状況を詠む。その中でも読者に刺激感を与えない上手さがある。

講演資料は最近の歌集から随意に挙げた例であり、良い作品、歌集は他にも多数ある。かつては寺山修司、塚本邦雄、春日井建、葛原妙子、山中智恵子といった天才や異彩の歌人達がいたが、今日では減っている。しかし、編集者を三十年続けて来て、相対的には歌人にはそれなりのレベルの人が増えていると感じる。

従つて、今から歌壇を担う若い人達は奇をてらうだけではなく自分なりの「発想」・「視点」が必要である。

兵庫県歌人クラブの受賞者の作品を拝見すると良い作品があり、才能ある人が出て来ている事を実感する。今後の展望に期待したい。

流派を超えた短歌交流誌
楠田 立身 編集

象
(SHO)

入会歓迎
〒670-0843
姫路市城東町清水13-7-404
楠田方 ☎(079)285-1695
短歌ぐるうぶ象の会

創刊 宮 柊二

コスモス

〒181-0001 東京都三鷹市井の頭1-2-17

姫路支部

支部代表 飯田 進
運営委員 尾上田鶴子 浜崎 泰子
矢内 温代 三宅 幸子
連絡先 〒671-2233 姫路市太市中678
飯田 進 ☎(079)269-0513

コスモス
加西勉強会

第2 金曜日 13:00~ アステシア加西
第2 土曜日 13:00~ 中央公民館

連絡先
〒675-2365 加西市畑町577
藤岡 成子
☎(0790)42-0415

兵庫県内支社

白珠

入社費 五〇〇円
社費 費六ヶ月 六〇〇〇円
旧号見本 切手 四〇〇円

神戸白珠の会
宝塚白珠の会
加東支社
淡路支社

〒562-0001 箕面市箕面三十一五十八
白珠社
代表 安田 純生

佐用短歌連盟

会長 安藤 直彦

吉菅 新 尾船 グループ代表
田原 家 上引 貴明
照艶 イサ子 子 子 子

[連絡先] 0790(84)0150 新家 イサ子

コスモス 葛の花

会場 多可町八千代区
八千代プラザ
第2 水曜日 午後1時

代表
〒677-0121 多可郡多可町八千代区
花の宮1171
岸本 しげ子
☎(0795)37-0680

続いて、質疑があった。

Q1 『思川の岸辺』はロマンに傾くと批判的な一方で、『桜の木にのぼる人』は日常的なりアルが好意的に捉えられたが、それらはどのような判断基準に基づくのですか？

(ヤママユ 田中教子氏)

A1 『思川の岸辺』は己の情に凭れた作品が多く歌謡曲(大津美子『ここに幸あり』)の世界であり、人によっては甘く映ってしまう。一方、『桜の木にのぼる人』では震災逃避とか言われる中、生き抜く生命力とプライドがある。

後日に短歌往来誌にて『思川の岸辺』、『土と人

交流の輪のひろがる

新年会

兵庫県歌人クラブ恒例の新年会は1月10日、三宮東急REIホテルで開催された。今年の抱負と六十周年に向けての意欲を述べられた安藤直彦代表の挨拶に続き、昨年度各賞受賞の楠誓英、小松カヅ子、武富純一、藤本則子の各氏に花束が贈呈された。中川昭幹事の力強い乾杯の発声の

と星』について徹底討論するので、併せて参考にされたい。

Q2 『みどりの卵』の「土に安らぐ」は大震災を経ると素直に読めない。前後で短歌はどう変化したのですか？

(心の花 武富純一氏)

A2 作品が何時成立したかは不明だが、土は地球誕生時から元素(筆者注 現代科学の元素は周期律表に基づくが、古代哲学の元素はより包括的な存在であり、後者を指すと思われる)で汚れても本質は変わらない。元素はより長期的視野で認識すべきではないか。その観点からは、『土と人』星』は土人の下にある物

星人の上にある物、と人間の位置を深く問うている。文学のテーマで自然を捉えるのは難しい。

他にも幾つかの質問があり回答で、佐佐木幸綱と塚本邦雄は対極にあったが、信頼関係があり、字に対する拘りは通底する等の洞察が聞けた。

更に、資料に取り上げられた桂保子氏より感謝の言葉があり、前田副代表より「普段は何えない及川先生の貴重な話が聞けた。県歌人クラブは今後も切磋琢磨を図っていく」との挨拶があり終了した。時間が限られた中、司会の小林副代表の努力で進行が整い、無事終了した事も付記したい。

(記録 來田康男)

「受賞しました」

☆第24回玲瓏賞受賞

平成26年5月 廣庭由利子

☆日本歌人クラブ賞受賞

平成27年5月 『白雁』 楠田立身

☆水響賞

平成27年5月 藤本則子

☆2015年心の花賞受賞

平成27年 武富純一

☆姫路文連文化功労賞受賞

平成27年11月 小松カヅ子

(松田辰子)

新月

編集発行人 筒井早苗
発行所 奈良県生駒郡斑鳩町
稲葉西二一六一三〇
☎〇七四五七五六一六七〇〇

芦屋支部

西村 郁
☎〇七八七三三一一八五六九

西宮支部

市川美恵
☎〇七九八五三一〇四五六

但丹歌人(隔月刊)

発行 但丹歌人会
代表 尾形 貢
編集発行人 中島眞喜子

〒669-5229 朝来市和田山町宮438
☎(079)672-2334

足立美津子 井上澄子 衣川由弥子
斉藤好正 高橋博子 中島眞喜子
菅野 君枝

丹生 TANZYO

主 張 生活写実を主体として真剣に作歌力を深めようとする集り
創 刊 昭和二十一年
代 表 兼貞 靖行
☎673-0424 三木市自由が丘本町2-232

☎(0794)83-0803

編集同人 井口通子・林 茂代・藤井貞子・前中 仁・兼貞靖行・上倉佐田子・山中洋子・山本樹一・土居きよ

☎673-0533 三木市緑ヶ丘町東2-11-5

事務局先 山中洋子方
☎(0794)84-0296

振替口座 00950-9-195197

高嶺

昭和2年 創刊
昭和21年 継承
平成8年 継承
平成25年 編纂
幾忠 冬鳥
早川 生二
昭二 井上 江島 彦四郎
野瀬 昭二

支部長・運営委員 石橋 光子 井口 通子 大塚 照美
坂田嬉和子 正法地清美 松田 郁子
松田 芳子 福井テル子 奥家登喜枝
糸田富美代

△事務局 伊藤 敦子
〒673-0011 明石市西明石町4-7-21

☎(078)927-4439

千鳥短歌会

山桜や紅葉に染まる山々。波荒く、また風ぎる瀬戸の海。渡る千鳥。取り巻くすべてが歌心を誘う恵まれた環境にある短歌会です。月一回、第一土曜の午後行われる例会は活気に満ち、和気あいあいの楽しい雰囲気です。

代表 山田 恵子
〒656-0426 南あわじ市榎列大榎列
☎〇七九九四二二〇六二

潮音

大正4年創刊

編集・発行 木村 雅子
〒248-0011 鎌倉市扇谷3-11-4

神戸歌会 石橋 妙子
〒658-0072 神戸市東灘区岡本2-10-3

☎(078)441-3740

幹事 増井 定子 三津野幸代
安田千富美

會計 福山 裕恵
監査 三木 雅子

平成28年度
兵庫短歌賞

野田かおり (未來)



1982年生まれ
姫路市在住
アララギ派短歌会
「未来短歌会」会員
2016年、第1詩
集『宇宙(そら)の
箱』を上梓

桜が咲く頃、舟は

- ・声ひとつと玻璃となれり水鳥はひかりのなかへ飛び立ちてゆく
- ・手のひらに逃してばかり春の水 遠いあなたへメールを送る
- ・しる皿を重ねてうごく光あり傷つけ合ひて痛みは増して
- ・グラタンの皿にあふれるあの白いさみしさに似て春の握手は
- ・体温を残しゆく手は遺伝子の舫のやうに眠りをつなぐ
- ・みづからを失ひたき日もあるだらう春光のなか鳥は目を閉づ
- ・風つかむ翼するとき鳥の目は空のさびしさ宿してゐらん
- ・いつまでも忘れずゐるよ、その肩にさくらいちまい付けてみたこと
- ・降る花もだれかの記憶ひだり手がかすかに冷たい川べりを歩く
- ・ゆうぐれに呼ばれるやうに振り向けば木々のあはひをのびてゆく影
- ・記憶とは揺れながら燃ゆる舟であり漕ぎ出すたびに夕焼けあなた
- ・風野原、みどりの葉、朽ちた椅子

新人賞

森垣 岳 (ヤママユ)



1982年生まれ
尼崎市在住
アララギ派を経て現在ヤママユ所属
2008年短歌現代新人賞受賞
2014年現代短歌社賞受賞
歌集『遺伝子の舟』

無名と云う雲

- ・あらかじめ手を温めおく息白き朝我が子を抱き起すため
- ・ひとひらの雲を指さし「んな」と言う
- ・あの雲の名は無名というらし
- ・やわらかな風と息子を抱き上げる帰

- ・みな柔らかき陽に染まりゆく
- ・死は光なのだらうか真白なる喉のほとけのかなしきかがやき
- ・組み立てて壊す衝動起こりきて教室われは椅子を下ろせり
- ・いちまいにひとり忘れぬ指先に破れる紙のひかりの崩れ
- ・うしろすがたに葉陰は揺れてもうそこに戻ることはない、夕闇の庭
- ・写し絵ではなくひとすぢの線 春雨をあなたとずつと見てみたかつた
- ・ペルソナをはずしてごらん夕闇の桜を見上げてばかりゐるひと
- ・終はりなき時間のかたち光の環つらねて浮かぶ夜行観覧車
- ・窓の外にいつかまた会ふさくら花あなたを春に思ひ出しをり

- ・宅直後の習慣として
- ・熱帯の果実は赤く頬染めて帰宅直後の我に寄くる
- ・ままごとの玩具唾液に濡れながら冷えて日影に転がりていつ
- ・生まれでた時より泳ぐすべを知るオキゴンドウの海深かりき
- ・人々の群れを見下ろすあのビルの明かりの一つが父親だった
- ・六十兆も細胞は無し ししむらに宿る半数「森垣」の血は
- ・十八の我、いずれば憎むべき父となる日を知らず過ぎ
- ・旅先の一つとなりし故郷よいまだ生家は残っているか
- ・お互いを想うことなし父母よ秋雨寒き乾田をゆく
- ・一人すむ悲しき父よ本当の気持ちを未だ語らぬ父よ
- ・我が母に組み立てられし父の像が日ごとくずれて豊かなる土
- ・越えるべき荒野としての父母よ越えても我の荒野なるべし
- ・永遠に我が父母は身の内に星の軌道を描いて廻る
- ・ピロートの徽をまといし蜜柑捨てて子に与うべき果実を選ぶ
- ・明日より授乳をやめる決断を下されし児が歩みはじめぬ
- ・錆び付いたエンジンのごとき音立てて午前3時の児は泣き止まず
- ・胎内の記憶をいまだ引きずりて胎児のごとくうづくまり寝る
- ・もうすぐで季節が変わる 生徒らとセルリの種を一つずつ播く

新人賞

宮城 十子 (潮音・花鏡)



1983年生まれ
三木市在住
「花鏡」「潮音」に所属し石橋妙子氏の指導を受ける
2009年神戸短歌祭にて兵庫県歌人クラブ賞受賞

鳶いろの髪

- ・日の暮るる保健室には洞ありてわれの抱けるかなしみ放つ
- ・鍵付きのキャビネットには収まらぬ秘密かかへる保健室開く
- ・同意書の呪文のやうなことばたち飽き飽きとして印を押したり
- ・検診は戦ひに似て指先の消毒液のぬめりを落とす
- ・消毒を終へたる部屋にわれひとり標本のやうに立ちつくしをり
- ・泡のたつ消毒液に浸しゆく歯鏡映せる泡の内面
- ・静けさと消毒臭あり保健室しらじら光る無菌空間
- ・放課後の中庭の真中仰ぎたり五月の天の青われのもの
- ・新しき土になじめる若樅の細き枝さつきの風にしなへる
- ・わたくしの未来占ふ水晶玉しろきあぢさゐ一輪映す
- ・紫陽花の色うつろひ眺むるごとわが恋ごころ距離おき見つむ
- ・フラミンゴの雨に打たるる嘴のへの

- ・字見ながら生徒らを待つ
- ・むかひ風ふたつに分ち車椅子の隊
- ・列いちやうの黄をひきてゆく
- ・きみの生くる世界へのどびら閉づる
- ・目に秋のひかりが乱反射する
- ・保護帽をぬぎて真つ向の秋の風さか
- ・だつきみの髪は鳶いろ
- ・担任の手を握り階段のぼるきみ赤き
- ・保護帽は王冠のやう
- ・きみの頬の絆創膏に描かるる銀杏ゆ
- ・れぬる声あげ笑へば
- ・出交はして笑ひあひたり夕暮れの灯
- ・りつきたる階段踊り場
- ・下校バス去りゆき空の青あはし微笑
- ・み漸くやめてよしとす
- ・一杯のカミツレ茶熱し息をふくひと
- ・ときわれはわれ取り戻す

奨励賞

遠藤 瑛子

1942年生まれ
 芦屋市在住
 短歌の勉強会「潮騒」
 に参加して、10年余
 り
 趣味 読書、スケッ
 チ、トレッキング、音
 楽鑑賞(兵庫県芸術
 文化劇場のファン)



二脚の椅子

- ・山小屋の二脚の椅子の物語ひかり差
- ・し込み話がはずむ
- ・浅間山砂の斜面を登るきみ山靴の跡
- ・わが靴のせる
- ・澄んだ青に見える虹彩わたくしはき

- ・みのことば探し続ける
- ・描かれた白磁の急須の青めだか群れ
- ・泳ぎいて何をささやく
- ・スカーフは春だねと言いつるいよね
- ・うしろで残し列車に乗り込む
- ・いつまでも頭の中どころころと消化
- ・しきれぬことば広がる
- ・春なのにさびしい心を投げつけた電
- ・話のことば消しゴムで消す
- ・夕暮れが連れてきたのかひりひりと
- ・したころあり闇にとけ込む
- ・海原は利休ねずみの雨の色難問解け
- ・ぬ春の哀しみ
- ・しっかりと握りしめてる掌を開くさ
- ・びしさだけが逃げていく春
- ・花に舞う黄蝶青蝶のペンケース贈り
- ・主住む札幌大雪
- ・暗闇に蝶のきらめくレター落ち赤い
- ・ポストがコトんと鳴った
- ・びよびよびようと風吹き渡り灰色の水
- ・平線は姿を消しぬ
- ・鳥影を横切った大鴉あれは誰かと西
- ・風に問う
- ・エスプレッソの濃き味のどを通りゆ
- ・き頭の中の文字を消したり
- ・冬星のひとつひとつを泳ぎ抜く点滅
- ・するも機影は孤独
- ・無数の過去を背後に倒したら無数の
- ・あしたはやつてくるだろう
- ・スカーフをくるくる花のように巻き
- ・捨てる捨てない見きわめ始め
- ・磨かれたガラス戸に映るうろこ雲か
- ・すかに動く小春日の午後
- ・張りかえた障子ふすまに影は濃くふ
- ・たりの元日ことなく暮れる

奨励賞

武富 純一(心の花)



1961生まれ
 豊中市在住「心の花」
 2009年毎日歌壇
 賞 第1、3回角川
 短歌大賞 大阪府賞
 第2回角川短歌大賞
 題詠大賞 2015
 年心の花賞
 歌集『鯨の祖先』

空港三丁目

- ・推敲の赤き字面の浮かびくる天声人
- ・語をじつくり読めば
- ・もしもいま強盗犯で名を馳せば何人
- ・いるか「やはり」というやつ
- ・解体し移築することゆつくりと一字
- ・一字を写してゆけり
- ・玄関の折鶴蘭の水やりは妻の棄てた
- ・る仕事のひとつ
- ・自転車のをれを追い越す特急のはる
- ・か頭上をジェット機がゆく
- ・図書館に向かう予定は蒸発し業務ス
- ・ーパーに生牡蠣を買う
- ・西日差す窓辺の洗剤ボトルより泡ひ
- ・とつ消え時のつづまる
- ・十八の春より臍の下にある金のパッ
- ・クル、革は代われど
- ・そのむかし父を笑いしわが耳もドラ
- ・マのなかのチャイムに込める
- ・水槽の砂の下よりときおりに昇る気
- ・泡をじつと待ちたり
- ・捨てかけてまた戻したり2Bの鉛筆
- ・ホルダーのちびた鉛筆

- ・忘れようとしてなのだろう下り坂へ
- ・ダルを強く踏み込んで
- ・若き日の円形脱毛よみがえり後頭部
- ・のみ長めに残す
- ・段取りを決めかねている靴の先自動
- ・扉がやわらかに開く
- ・ばあちゃんの叱咤か不意の強風にイ
- ・チヨウひと葉が額にビシリ
- ・「ありがとごさいました」の返信
- ・を忘れてキャンセルされし日もあり
- ・坂道を下れば空港三丁目飛び発つあ
- ・てはあらず どこにも
- ・離陸音いつも小さくわが町は静音技
- ・術の進化の下に
- ・たそがれを混ぜて飲み干す伊右衛門
- ・にわが残量をたしかめている
- ・目を開ける度に暮れゆく河川敷また
- ・閉じてみるすこし長めに

受贈歌誌・会報等

印南野文華・海市・花鏡・薫風・幻桃・コスモス姫
 路・白珠・象・丹生・但丹歌人・綱手・茅花・津布
 良・童嶺・鳶が城便り・とべら・波濤神戸・白圭・
 ひめぢ水鸞・文学園・山の辺・夢・えちうど・旅笛・
 林間・礫・六甲・川柳ふあうすと・尼崎歌人クラブ
 会報・大阪歌人クラブ会報・大分県歌人クラブ会報・
 熊本県歌人協会会報・堺歌人クラブ会報・長野県歌
 人連盟会報・西宮歌人協会会報・大和歌人・京都歌
 人協会会報・和歌山県歌人クラブ会報・埼玉歌人・
 姫路歌人クラブ会報・日本歌人クラブ「風」・梧葉

平成27年度
「兵庫短歌賞」選考経過
光と影の揺曳
黒崎由起子

平成27年度「兵庫短歌賞」選考委員会は3月25日神戸市勤労会館において安藤直彦・尾崎まゆみ・黒崎由起子・小谷博泰・小林幹也・田岡弘子・中川昭・三津野幸代各氏の出席のもと開かれた。応募者は年刊歌集より各幹事に推薦された10名と一般公募23名の33名。これらの作品を選考委員が一位に10点、二位に9点と以下十位までを点数化したものを前もって事務担当者に出、当日その集計結果を基に一次選考の一位から二次選考

を審議。今回の作品レベルは高く、熱気ある選考委員会となった。点数一位は「桜が咲く頃、舟は」(未来・アララギ派・野田かおり)。その繊細な相聞歌の一連からは光と影が揺曳し、喪失の哀しみが余韻として残される。表題も詩的な輝きを纏う作品にふさわしく、60点という圧倒的な支持を得、兵庫短歌賞に決定。続いて二位49点の「鳶いろの髪」(潮音・花鏡・宮城十子)と、三位45点の「無名と云う雲」(ヤマユ・森垣岳)が新人賞の候補として審議された。「鳶いろの髪」の保健室という異空間に身を置き、確実な描写力を基に現実との軋みを詠う

平成27年度兵庫短歌賞一次選考点数表

(評価順位を点数に換算)

選者名	安藤	尾崎	黒崎	小谷	小林	田岡	中川	三津野	合計
君のポラリス		7					3	10	20
空港三丁目	9	9	6		2	9	4	2	41
皆既月食			7	2		5	5		19
二脚の椅子	10	3	5	9	7	6	1		41
桜が咲く頃、舟は	7	10	9	10		7	10	7	60
無名と云う雲	8	4	10		10		7	6	45
どんなふう生きても			2	8		10			20
曼荼羅絵図	5			7	8				20
残星	3		3	5			8	9	28
鳶いろの髪		8	8	6	9	4	9	5	49

応募者多数(33名)のため上位10番まで記載

選考委員

安藤直彦・尾崎まゆみ・黒崎由起子・小谷博泰
小林幹也・田岡弘子・中川昭・三津野幸代

事務担当

桂保子・矢内温代・吉野節子

兵庫短歌賞全応募者(到着順・敬称略)

(公募・ノミネート)

長谷川喜世子、岡田恭代、武内栄子、眞住 彰、嶋澤隆、末澤千世子、大江美典、武富純一、棘木正市、福島妙子、小畑恵子、東 陽子、岡本絹江、西村節子、來田康男、真砂晃美、塩見俊郎、石飛俊郎、内藤みさを、竹村公作、遠藤瑛子、野田かおり、朝倉恵子、山本みさよ、小林まや、老月良一、菅原艶子、森垣 岳、小田部桂子、桂日呂志、福山裕恵、宮城十子、大塚公夫

今号に掲載できなかった平成二十七年兵庫短歌賞応募作品は次号にてその作品抄、選評を掲載の予定です。

乾いた感性が支持され、また「無名と云う雲」では父と作者との、作者と幼子との、血縁に向き合う抑制のきいた表現力が評価された。共に新人賞にふさわしく二名受賞となった。続く四位五位は41点の二名。「二脚の椅子」(遠藤瑛子)は人との出会いのなかで揺れる心を軽やかに詠いつつ日常に潜む孤独を捉え、「空港三丁目」(心の花武富純一)は現実の自分を醒めた目で見つめ、若さを失いつつある身のほろ苦い諦念が一連に漂うどちらもさらなる活躍を期待

し奨励賞と決定された。他に「残星」(花鏡・福山裕恵)、「君のポラリス」(大江美典)、「どんなふう生きても」(小田部桂子)、「曼荼羅絵図」(美加志保・桂日呂志)、「皆既月食」(礫の会・竹村公作)などが注目された。日常から何を切り取るか、次回も独自で多彩な作品を寄せていただけることを願う。

平成27年度
第3回幹事会報告

3月28日(月)、神戸市勤労会館にて開催。出席幹事28名。委任状23名。三津野幸代氏の司会のもと、安藤代表の挨拶に続き、議長に清水昭男氏を選出。
◇平成27年度事業報告
①神戸短歌祭「兵庫短歌賞」授与。鼎談「阿木津英氏を囲んで」パネラー阿木津英氏、江畑實氏、中川昭氏。
②7月18日 第5回歌集批評会。兵庫勤労市民センター小松カヅ子歌集、藤本朋世歌集52名参加。
③6月10日「会報」193号結社広告43社 1000部
④11月1日「年刊歌集」第55集刊行 応募総数(250篇)、350部発行

⑤11月14日ふれあいの祭典兵庫短歌祭 於姫路キャスパホール 入賞者表彰、作品評結社対抗歌合せ
⑥12月10日「会報」194号 歌会広告53件1000部
◇福島妙子氏会計報告。
◇兼貞靖行氏会計監査報告。
平成28年度
第1回幹事会(第3回幹事会に続いて)
◇28年度事業計画(主なもの)
①4月29日神戸短歌祭総会 県民会館バルテホール
兵庫短歌賞表彰式
講演及川(晋樹) 隆彦氏。
②6月18日(土)第6回歌集批評会 桂保子歌集、牧野秀子歌集 兵庫勤労市民センター。
③11月12日(土)ふれあいの祭典兵庫短歌祭 神戸市勤労会館大ホール。
④平成29年1月15日(日)新年懇親会併せて60周年記念祝賀会(ポルトピアホテル)。
◇設立60周年(発足昭和31年3月21日)記念行事
会報縮刷版発行を会員に意向打診三分の程度の賛成↓先送り。震災詠冊子も無理の意見↓代表が蒐集。60周年記念実行委員会立ち上げる。
◇顧問に推薦 野瀬昭二氏。
◇会費の値上げ 高齢化のため会員減少。会の充足をはかるため2000円に決定。

平成二十七年 度

兵庫のうた 秀歌抄 『年刊歌集』第55集より

はじめに

安藤 直彦

短歌は読者に共有されることよって作品となることを改めて思う。「作品」を持つということは喜びである。人生に短歌を選んだ個々が、結社、流儀、有名無名を越えて、「好いもの」を共有する。それぞれの生を大切に、創造営為の喜びの場として当『年刊歌集』特集があらんことを乞い願うばかりである。

兵庫短歌賞選者が選んだ「わが注目した歌一首」(あいうえお順)

安藤 直彦選

手の蚕「ぼく好きやねん」でも母が好きではなくて飼へない蚕 西村 節子
子と母の日常の具体が、子の掌にうごめく蚕を通路としてある普遍の小世界を生んでいる。

尾崎 まゆみ選

空白にうめるべきであるさみしさもうれしさもなくりんごは響る 上篠かける
「空白にうめるべき」が効いている。漢字と仮名のバランスも良く響りが声のように五感にひびく。

黒崎 由起子選

龍の眼に泪あふるる幻を暗き御堂のうへに眺むる 野田オリカ

龍の泪は作者の哀しみが見た幻、互いの魂が呼応しあつた魅力的な一首。

小谷 博泰選

霧深き朝ほととぎすひとこゑののちのひとこゑ 林のかなた 生田よしえ
霧で何も見えない奥からきこえる鳥の声、静かさとはるかさが快い。

小林 幹也選

原発のおおかたのこと知らぬままジャーに二合の米炊きあがる 山田 文
原発も釜であれば、ジャーもまた釜である。その共通点が無気味だ。

田岡 弘子選

白菜をざくりと割りぬかかるとき白菜太郎生れこぬものか 藤岡 成子
知に依らず理に走らず、まことに単純明快。遊びごころあつての「軽み」の歌である。

中川 昭選

係累をもちえぬ猫の足の跡無花果の木の影へとつづく
心象から写実に移行する精緻な言葉運びは他作も含め秀抜。

三津野 幸代選

視力とは別の目力しつかりと見えますメールのあなたの心 田岡 弘子
メールの主への何よりのラブコール。優しさと思いやりが溢れる心眼に敬服。

社会詠、時事詠に憶う

荒濱 悦子

喉元を過ぎたれば震災を詠ふ人少なしへ主よ 憐れみ給へ
三八銃抱きしことあるこの腕に曾孫あやせば声挙げ笑う 楠田 立身
土居 正
議事堂前の銀杏並木よ知つてるか六十年安保の樺美智子を 石田 勝啓
一瞬の閃光の後の地獄絵図七十年前のヒロシマのあの日 伊藤 弘子
死線越え子よ戻りこよ五銭玉結びつけたる母たちのこゑ 浮田 伸子

解決の未だつかざる拉致問題を棚上げにして選挙カー走る 小谷智聰子
いつの日か古き良き時代とこの今を言う時あらん、戦争が来る 小谷 博泰
いちまいの赤紙により戦場に逝かしめし兵らのこゑをこそ聞け 澤田 尚夫
その骨もいまだ還らずシベリアに遺棄されしままの戦友を憶うも 南 裕之

「震災二十年」 献花に埋もるる銘板の六千四百余名のいちかへらず 保田 ひで

戦後七十年、阪神淡路大震災二十年、東日本大震災四年。列島に幾多の痛ましい災禍が起きた年であるが、二百五十人中社会詠、時事詠は三十二名のみ。

楠田立身氏の「喉元を過ぎたれば」の一首にまさに詠みつくされています。

戦争や震災を知らない世代が増えゆく今こそ、私達は不戦の誓いを、社会現象の傷痕を次世代に詠み伝えねばならない。藤本則子「中東に続く戦」吉野節子の「水川丸今昔」も感動。さあ癒しと記録の詩型に心ゆだねて詠み遺そうではありませんか。抄出した十首についてはコメントするまでもなく、どの歌も沈潜の境地で事実をさりげなく詠み胸に迫る。「三八銃抱きしことある」秀歌の抱きしの一語に命を賭して三八銃を握った過去と微笑ましい現実との今昔感に歴史を感じ感銘した。安保闘争時代、上京して偶然目にしたヘルメットの学生隊と美しい樺美智子の描かれたプラカードを思い出す。ヒロシマの地獄絵図・シベリアに遺棄の戦友の歌など涙ながらに鑑賞した。貴重な年刊歌集です。

秀歌 十首

中川 昭

たそがれのむらさき色がおりてくるシーラカンズになつて眠ろう

遠藤 瑛子

ラ・フランスは窓辺に雨を見上げぬる少し太つた猫の背のやう
シーラカンズの爪だね君の湯上りの足の巻き爪ばきばき切りぬ

太田富美恵
上根美也子

無防備に人を信じるはずもなく先の尖つた日傘を掲げる

黒崎由起子

青色の大きなかぶと虫背負いヴァイオリニストの青年来たり
色あせしノートにつづる片恋ぞ身の始末する老いの手止まる

小林 まや
武内 栄子

秋はまだ深まるらしいつづら実のやうなる赤丸 検診数値に
さまざまな向きに印鑑押してある回覧板が戻つて来たり

たなかみち
西塚 洋子

人乗せぬ回転木馬が夕暮の思考回路をからまはりする
半夏生の片白の葉の涼しきを生けて写真の母に見せたり

林 二子
牧野 秀子

遠藤作品―生きている化石と呼ばれる古代魚だから、化石のように眠りたい
というもの。一、二句の措辞に工夫がみられる。太田作品―この素描がおもしろい。作者も猫もアンニュイな一日の光景である。上根作品―遠藤とは違った

シーラカンズで、これは丸ごと愛の発露だ。殊に下旬が小気味いい。黒崎作品―
虚実ないまぜの人間社会を針のように刺す。このエスプリがいい。日傘の氏
には近づいてはいけない。小林作品―「かぶと虫」の喩がいい。美しい音感に
期待する作者の心動きが見えるようだ。武内作品―ふとしも止まった「老いの
手」に、この作者に流れた時間の切なさが伝わる。たなか作品―「赤丸」と「秋
の深ま」りの重層が巧みだ。西塚作品―住民のそれぞれの個性を端的に表現し
て隙がない。林作品―「からまはり」が実に理知的で巧みだ。牧野作品―半夏
生の白い裏葉を遺影の母に見せた。巡る季節の喜びは故人も生者も同じである
がゆえに深い一首だ。

心のあり処

内海 永子

①ビスケット焼くほどの煙が森にたつ雪くる前のあたたかき日に

青田 綾子

②凡庸な人の子であれラファエロの幼きイエスに似てきたれども

秋本 多恵
芦田 礼子

③傾けるままに二十年ガス燈は震災メモリアルを解かれず

石田フサ子

④十五軒の村に一軒子どもいてその三人が広場で遊ぶ
⑤これからは結びの歲月先ず古書の処分 それから・それから・それから

岩田美代子

⑥反対意見友に言わざる夜の更けを『きのこ図鑑』にタマゴタケ赤し

鎌谷 克子

⑦踏み越える前にしみじみ眺めおり彼岸花咲くその一線を

黒崎由起子

⑧あと半歩に電車のドアは閉まりたり島の船なら乗せてくれるよ

塩澤 文字

⑨アルハラの上司の頬にキスをした 予想に反して喜ぶ 困る

来田 康男

⑩花のいのちの白つつましき雪の下どくだみ南天 いいねいいね 田岡 弘子
①一編のポエムのようなあるいはメルヘンの一節のような②赤子はある時た
しかに聖母に抱かれたイエスに似ている。だがイエスにはならない方が良い。
非凡は日常を脅かす③傾いたガス燈の背後に見える十字架④過疎の村に子ども
がいる事の明るさと淋しさ⑤それからのリフレインが軽やかで終活もたのしい
ような⑥言わなかつた言葉は毒素となって蓄積される⑦彼岸花の咲く彼方の界
はいず辺に通じているのか⑧時間の流れは場所によって変る⑨現代の短編小説
のテーマになり得る⑩三つ共につつましい白花。結句の軽やかさは⑤に通ずる
か。

佳き歌はこれという程の見識は未だ持ち得ていない。ただ惹かれる歌はある。
抽出してみると日常を少しずらして詠んだ歌が多い。そして軽みとユーモア。
もう少しシリアスで技巧的な歌が好きだった苦なのだが。年齢の故かはたまた
生来の楽天性か、とまれ現在の私の心のあり処を表出した十首といえようか。

私の選んだ十首

自然

青田 綾子

復興を詠みましし皇后のいしづみが震災二十年の白き陽反す

楠田 立身

蜜蜂の絶えてし来され梨花一枝雄蕊は徒にそよぎてあたり
樺木は切りつめられて芽吹きたり(奇麗な街)の看板下げて

安藤 直彦
生田よしえ

庭木々のみちあかりも終はりたり歳晩の雨音もなく降る
うすうすと陽の差しくればこぼれぬる塩のひと粒づつが影もつ

浮田 伸子
太田富美恵

街灯の黄光の下に立つ一樹片側は夜に削られてあつ
冬陽炎ぐらりと徑を傾けてキャベツ畑に光を移す

楠 誓英
下村 千里

昼さがりの地面しるじろひかりおり幼きころのさみしさに似て
落ち水が溜りて青を深めゆく色なきものの色の重なり

藤本美知子
三宅 隆子

野を山を白紙となして正月の雪が広がる真つ新な画布

楊井佳代子

動物・植物

飯田 進

追伸の一行にこむる思ひなり老いの桜のふぶきやますも
ラ・フランスは窓辺に雨を見上げぬる少し太つた猫の背のやう

石橋 妙子
太田富美恵

役に立つ文章にだけ線を引く 葉代わりの玉虫の翅
 ブロッコリーの傘のやうなる形してローマの松は天にのびゆく
 蛭かと思えば青き梅雨の星点滅しつづ現れにけり
 抱つこより餌を欲する仔猫との駆け引きに敗れた餌をやる
 いきなりの雨にかけ込む軒先にしおから蜻蛉としばらくの刻
 七丁目で終るこの町夕映えを八丁目へと鴉が急ぐ
 玄関の暗がりの奥に息づきて「水飲み鳥」とふはかなかき玩具
 「大切な人を元気にしてあげて」海蛇の粉かく売られをり

生活

伊藤

佐重子

一斉に植ゑたる苗の取り入れに差はありキャベツの巻きの緊りの
 ベッドよりいつも見ている庭隈に塀を凭せてスコップ置かる
 重曹で磨いたヤカンに夏空の入道雲を映してみせる
 田植機はしゆるしゆるしゆると苗下ろしたちまち水田青田に染める

安藤 三從
 上田 一成
 遠藤 瑛子

トイレまでラジオ持ち込み夫は聞く一死満塁阪神の攻撃
 一切れの京筒がテレビより春だと言うからこたつより出る
 按摩機の部屋を占めている大きさに慣れて夫との暮らしは今日も
 人生の縮図ほの見せ立ち呑みに酔ひてたちまち偉くなる男ら
 水田に車体を沈ませ進みゆくトラクターは水を均して
 三人の子らの家庭の綻びの見えぬふりするふたりのくらし

生・老・病・死

本田

勝彦

同行の妻は無言の遺影とて心の支え咳く相手
 先に逝く幸をゆづりて千夜過ぎましたと夜風に告げて差し含む
 奥行きのあるエレベーターに乗るわたし極の場所をあげて立ちたり
 どこまでも人に近づくロボットの未来を憂ひて見入る映像
 悲しみも日が経つうちに薄れゆく庭の花々春を告げている
 懸命に生きて傘寿の同窓会緞の深さに人生をみる
 ロボットは動きなめらか松葉杖つくわたしはぎくしゃくぎくしゃく

嶋澤 隆
 桂 保子
 楠 誓英
 松田 博子
 松村 和子
 前田 昭子
 久米川孝子
 土居 正

朕がため死ぬとの命より解かれて世に遅れつつ晩年となる
 あじさいの海に紛れて輝かむアクアマリンの左のピアス
 ゆくゆくは塵と果つべき命ゆえ光を一粒生み落としたし

真砂 晃美
 吉永 明代

社会・政治

久米川 孝子

集落を見下ろす傾りに陽光を集めて昏きソーラーパネル
 コンビニの明かりに屯なす少年ら入試パスらし声の弾めり
 集団的自衛権には反対とひとりつぶやく犬に服着せ
 童謡をならし回収車は古紙古本と共に過去も積みてゆきたり
 いちまいの赤紙により戦場に逝かしめし兵らのこゑをこそ聞け
 布を噛み二進も三進も動かないジツパーのような会議だ眠い
 小春日の女性専用車両には隙だらけなるからだが並ぶ
 こうべ垂れスマホに見入る人ら乗せ一輛電車は枯野に入りし
 安保法制のらりくらりとかわされて夜ごと蛙が声あげている
 孤独死は言葉聞くだに寂しきに検死要する変死あつかひ

世態

志方 弘子

幼子は残りてなおも遊びたりパパが来るやらママが来るやら
 故郷を離れて一年子の家で六畳一間が我が城となる
 村おこしの希いになれば鯉のぼり人家まばらの谷をそよげる
 消費税二円の切手の白うさぎ八十の襦をかけたしゆけり
 迷ひ出でつひに帰らぬ人もある山の最中の老人ホーム
 孤独死は言葉聞くだに寂しきに検死要する変死あつかひ
 定期貯金崩して向かふ東北にボランティア有志四年目の夏
 春がすみ漂ふ街と見るまでに大陸よりのPM2.5とふ不粋
 原発のおおかたのこと知らぬままジャヤーに二合の米炊きあがる
 三十五キロ渋滞の中の幼二人チャイルドシートに五時間を耐う

仕事

矢野 一代

事了ふる茅の輪を鉦に解くわれか解いて燃すべし咎のぬめぬめ
 農に生きてがつしり太き友の五指小さき折鶴たちまち仕上ぐ
 古稀までも勤めをなせば満足と放つ言葉に未練がのぞく
 声低くうおううと唸りつつ神輿に神様移す神主
 米寿なる人は背筋を伸ばし行く今日も散歩を仕事と言いて
 青空をきみは見しかな牛を連れ山の畑に通ひし日々も
 われの手を働きの手だと言う姫様みたいな手をして義母が
 処理場へ今宵出荷の百日鶏が秋の陽を浴び餌を啄む
 入院の夫の不在を奇貨として週にいちどの家事放棄デー
 戦争を知らぬ子役が蹴飛ばされ孤児となり生く「戦争」を演ず

安藤 直彦
 大谷 忠子
 上月 昭弘
 小林 まや
 杉本こま子
 西橋 美保
 西村 久代
 藤田つた糸
 三宅 幸子
 森 英子

老月 良一
 小出塚満恵
 新家イサ子
 中川 昭
 本位田米美
 三宅 幸子
 森田 哲子
 保田 ひで
 山田 文
 吉田千代美

旅

八ヶ岳星のロマンを語りたる君の瞳の清らに涼し
ふと聞こゆ遺跡と共に生きて来しローマの松の深きためいき
一人行く列車の旅の先に命継がれし者達のいて
雨しづく車窓曇らす旅列車心の区切りまたも遮る
俳句手帳 ペン 虫眼鏡 吟行にゆけるがごとく逝つてしまへり
日豊線田園風景つづきみてさびしき旅の果ての延岡
波照間の黒潮寄する南端に傘寿と喜寿が点となり立つ
全身で春の頌歌聴くやうに孫の旅立ち見送る我は
舞鶴の丘に見下ろす棧橋に消えぬ憶いは嗚咽となりぬ
敗れたるわれらを母国へ運びくれし氷川丸は悲母、抱きて守りて

愛・恋

部屋の音すべてを消した真夜中に濾過され残る君のことは
幾つもの偶然ありてきみと居るそんな気がする晩酌の時
梅雨あけの真青の日盛り会ひにゆく絹傘葺の日がさ廻して
だけれども雪の続きはきみといて沈丁花の花言葉は不滅
しやがんではまだ花の名を読み上げる植物園にをさな児とみて
あなたへの近道なのに了解のメール送れぬ雑踏の中
鳴き声の絶えた蛙を呼んでゐる太郎の笛かあはき虹たつ
天国も白や黄色の彼岸花咲いていますか便りがほしい
杖ひきても歩みがたかる姉に添い靴はかせやる妹を見き
「似合ってる」と君が言ってくれたから迷わずつける珊瑚のブローチ

兼貞 靖行

阿久根シヅ子
古池 厚子
高野由紀子
嶋澤 隆
鈴木 紀子
浜崎 泰子
藤井 貞子
松尾 鹿次
南 裕之
吉野 節子
桂 保子
池本登代子
石田 勝啓
奥田 洋子
上篠かける
小林 幹也
齋藤 和子
田中 教子
藤田つたゑ
船橋 貞子
松田 貞枝

受贈歌集・歌書(兵庫県内分)

『杜の灯火もりのともしび』

但見美智子
平成27年7月 青磁社
夕暮れの杜にちらちら点る灯の窓より見えてここはふるさと

☆『子育て歌日記』

三人子の同じ寝相よ片足を栗のように布団にはさむ
10月 北羊館
10月 現代短歌社
高橋睦世

☆『ゆらりゆらり』

谷川を背にしておわす地蔵尊赤き帽子のにあうお顔で
10月 現代短歌社
高橋睦世

平成28年度ふれあいの祭典 兵庫短歌祭

主催 兵庫短歌祭神戸市実行委員会・兵庫県・神戸市・(公財)兵庫県芸術文化協会・兵庫県歌人クラブ
後援 兵庫県教育委員会・神戸市教育委員会・神戸新聞社

応募要項

作品 未発表作品1人1首
締切 2016年8月20日(土)当日消印有効
送り先 〒675-1113 加古郡稲美町岡1630 前田昭子方
ふれあいの祭典兵庫短歌祭事務局宛
TEL 079-492-1766
応募料 1,000円(切手不可) ※応募者に作品集無料送付
応募方法 応募用紙またはA4の原稿用紙に郵便番号、住所、氏名(ふりがな)、電話番号、作品1首を明記し、応募料を添えて郵送してください。
選者 兵庫県芸術文化協会、神戸市、兵庫県歌人クラブ顧問・幹事
賞 文部科学大臣賞、兵庫県知事賞、兵庫県議会議長賞、兵庫県教育委員会賞、神戸市長賞、神戸市議会議長賞、神戸教育長賞、ふれあいの祭典兵庫短歌祭神戸市実行委員会賞、神戸新聞社賞、兵庫県歌人クラブ賞ほか多数。

短歌祭のご案内 <入場無料>

日時 2016年11月12日(土) 午後1時~午後4時半
会場 神戸市勤労会館7F大ホール(三ノ宮駅東へ4分)
内容 入賞作品表彰と講評等
催し 「現代歌合せ」 判者 吉川宏志 歌人等未定

☆『水の言葉』

秋の水のやうな言葉を探しをり澄みて変幻自在の言葉
11月 現代短歌社
☆合同歌集『石落』第5集
五十五周年記念号 11月 香守短歌会
岩田百合子

☆短歌作品集『猪名川』16号

3月 足立晶子短歌教室
初対面の背高のつぼが好きになり自己責任の半世紀すぐ 政処紀子
☆『モンキートレインに乗って72』
昭和19年の会アンソロジー
4月 ながらみ書房

☆『加良怒からの』

法要終え秋日吸いたる座布団が仕舞える箱の蓋を押し上ぐ
吉野節子
平成28年3月 ながらみ書房
春寒き磯の口開け、海に入る女それぞれ化粧してをり
生田よしえ

☆『ふたたびの円』

同心円を消されし水毬波ひとつ越えて作れりふたたびの円
3月 角川書店
生田よしえ

☆歌文集『赤いレトロな焙煎機』

遥かなる南米大陸をめざして
大島史洋、足立晶子、小谷博泰
晋樹隆彦、中野昭子、南 輝子他
人生も引け時かなと遠くきて路面電車に揺られて思う 小谷博泰
遥かなる南米大陸をめざして
4月 春風社
再会の言葉は「やあ」とシンブルにサンパウロの街々ぐれてゆく
玉川裕子

地区通信

【阪神】尼崎歌人クラブは平成27年8月31日、97名参加の終刊特集号を発行。▼11月4日、尼崎歌人クラブはホテル・ニューアルカイックにて「お別れ会」を開催。来賓の江戸雪、前田康子各氏をはじめ中野昭子会長他46名参加。尚この「お別

れ会並びに尼崎歌人クラブの閉会の記事により尼崎歌人クラブ会報は88号で終刊となった。▼平成28年2月14日、園田学園女子大学にて第13回契沖顕彰短歌大会開催、選者安藤直彦、田岡弘子、たなかみち各氏他。約400名参加。
(たなかみち・吉野節子)

会開催、参加者は中川昭、明石多美子、三井英美子、矢野二代各氏ら30名。歌会には黒崎由起子氏ら5万華鏡の会員6名も参加。▼12月1日、神戸芸術文化会議より『2014こうべ芸文アンソロジー』刊行、安藤直彦、石橋妙子、浮田伸子各氏ら8名が参加。▼1月8日、文学圏新年歌会開催、20名参加。▼12日、文学圏運営委員会開

催、代表下村千里、発行人浮田伸子、編集人青田綾子各氏が再任。▼1月24日、東京神田会館において潮音新年会開催、増井定子氏が潮音賞受賞。三津野幸代氏が披露、神戸より参加者10名。▼26日、ホテルオークラ神戸において神戸芸術文化会議学術セミナー・新年のつどい開催、浮田伸子、中川昭各氏が参加。▼2月1日、尼崎ポツインホテルにおいて花鏡新年歌会開催、40名参加。▼6日、京都セントノームホテル

において関西潮音新年歌会開催、参加者50名、神戸より10名参加。▼3月27日、チサンホテル神戸において竈本直子歌集『子育て歌日記』出版記念会開催、安藤直彦、田岡弘子、浮田伸子、たなかみち、中川昭各氏ら43名参加。▼4月6日、生田神社において曲水の宴が開催され、井戸敏三泉知事、安藤直彦、中川昭、小林幹也、尾崎まゆみ、西橋美保、廣庭由利子各氏が参宴。披露、近衛忠大氏。▼4月7日、12日、さんちかホールにおいて「神戸の百人色紙展」が開催され、安藤直彦、尾崎まゆみ、中川昭、黒崎由起子各氏が出品。(黒崎由起子)

追悼

努力の人

松田和薫先生



ある。」と短歌会をはじめ献詠祭、印南野半どんの会、万葉の森の会を設立され、積極的に文化活動に取り組んでおられ、平成19年102歳でご逝去。

出す営みであり、よりよい価値の創造のために精進したい。常に挑戦する好奇心を大切にしたい。風雪にあつて大分傷んでいるが生命の花を咲かせ続けたいと思つた。」と何事にも熱い心を持つて生きてこられた先生。最後の勤務校泉立明石清水高校の校門の脇に残された「熱い心で生きよ」の青春の碑に先生の人生を知る事ができます。私たちが先生の強い意志を受け継いで、地域文化の発展と継承に努めて参りますのでいつまでも見守って下さい。長い間一緒に活動させて頂きありがとうございました。安らかに

松田和薫先生は12月24日、ご自分で車を運転して病院に行かれ、1月8日『想うこと総て成し遂げ悔いもなし心足らいて黄泉へ往く』の辞世の歌を残して旅立ってしまわれました。享年89歳でした。

稲美町の万葉学者で国文学者の中嶋信太郎先生は「文化を持つことは生きるあかしで

とと身をもつて教えて下さいました。「文化とはよりよいもの、より美しいものを作り

おやすみ下さい。

前田昭子

【明石】11月23日、明石市生涯学習センターにて第42回明石市文芸祭表彰式を開催、短歌一般部門の応募総数326

首、選者楠田立身氏。市長賞内海永子氏。議長賞伊藤敦子氏。ジュニア部門の応募総数2524首。選者田岡弘子氏。式後、選者の講評。▼11月30日、明石市柿本神社にて第155回柿本神社秋季献詠祭を開催、選者楠田立身氏。兼題「蜜柑」競点題「祈り」▼1月1日、明石ペンクラブ(代表野瀬昭二氏)は会報137号発行。▼2月27日、「明石大門」35集掲載の短歌合評会。司会野瀬昭二氏。(伊藤敦子)

【姫路】11月26日、姫路市民会館にて姫路歌人クラブ合同歌会開催。出詠113首。小畑庸子、神保原廣巳、小松カヅ子、水野美子、久米川孝子各氏他65名出席。▼11月29日、高砂市鹿島殿にて小松カヅ子氏は姫路文連文化賞「文化功労賞」を受賞。▼3月20日、姫路市民会館にて狩野一男氏を迎えコスモス姫路支部歌会開催。水野美子、藤岡成子、久米川孝子各氏他40名出席。(飯田進)

【東播】1月10日、稲美町文化連盟主催による「小中学生の新春かるた大会」に於て前田昭子氏読み手を担当。▼2月19日、茅花短歌会稲美町ふれあい交流館のサークル発表会に短冊を出展。▼2月27日、藤岡成子歌集「雨はときどきやさしくあらず」の出版

記念会がチサンホテル神戸で開催。久米川孝子氏出席。▼3月5〜6日兵庫県公館にて伝統文化体験フェスティバル開催。前田昭子氏参加。▼3月9日、茅花短歌会は茅花誌第177号を松田和薫氏追悼号として発刊。▼3月13日、第39回菅原道真公奉賛献詠祭を稲美町天満神社にて開催。献詠110首。選者中川昭、前田昭子各氏特選8名、優秀7名。県知事賞玉川朱美氏。出席者48名。今回は会長松田和薫氏の突然のご逝去により小中学生の応募を急遽中止。(前田昭子)

【中播】10月29日、神戸ANAクラウンプラザホテルにて小畑庸子氏(水憲)はKCC短歌教室における講師の永年勤続表彰を受ける。▼11月7〜9日、香寺・恒屋川短歌会は姫路市公民館祭りに協賛して短冊出展。▼1月27日、市川町文化協会は新春短歌会開催。阿部綾子、内山嗣隆各氏入選。選歌と選評を小畑庸子氏担当。▼2月7日、神崎町文芸祭(神崎町神崎公民館)にて神保原広己氏入賞。選歌と選評を小畑庸子氏担当。(生田よしえ)

【北播】11月15日、アステアかさにて第49回加西市文化祭文芸祭開催。短歌応募数一般の部201首。選者尾崎まゆみ氏、市長賞丸山文子氏(加東

市)ジュニアの部柏原みずきさん(北条中2年)出席者加西市長西村和平氏他35名。▼同日西脇市西林寺椿楓庵にて市文化連盟主催の「照楓会」短歌大会開催。出詠16名。出席者9名。互選高点者藤中光代、三村時枝各氏。▼1月1日、西脇短歌会は「童嶺」56号発行。出詠者37名。▼4月、美加志保短歌会の歌誌「美加志保」の編集兼発行人が松尾鹿次氏に代り内藤晴樹氏が任に当たる。▼4月29日、西脇市高松町長命寺内宝光院にて第37回源三位頼政公奉賛献詠短歌大会開催。応募数84首。選考は北播各地区幹事13名。講師三村時枝氏。特選第一席橋間時子氏(多可町)。出席者藤原孝雄氏他25名。(松尾鹿次)

【西播】2月18日、新宮公民館にて、第37回たつの市新宮短歌俳句大会開催。選者、小松カヅ子氏。一般の部126首、特選松田津也子氏他。ジュニアの部219首。特選西原杏さん(新宮小)他。▼3月20日、南光文化センターにて佐用町春季短歌大会開催。出詠27人52首。春季大会賞河副紀子氏。安藤直彦、新家イサ子、菅原艶子、船引貴明氏ら27名出席。来賓佐用町長、議会議長、教育長、文化協会会長、神戸新聞社佐用支局。(安藤直彦)

【但馬】2月1日、「第二回朝来市文学のつどい」作品集発行。応募、一般の部、100首。選者安藤直彦氏。▼2月24日、新温泉町「前田純孝賞」学生短歌コンクール発表。応募、4405首。選者、佐佐木幸綱氏。▼3月5〜4月6日、新温泉町浜坂先人記念館以命亭にて「前田純孝賞」入賞者手書き作品集「展」▼3月15日「たじま作品集第40集」発行。短歌出詠者50人。▼3月21日、浜坂先人記念館以命亭にて「短歌教室」講師青木信、足立勝歳各氏。▼4月23日、豊岡市民会館にて但丹歌人会「春の大会」開催。▼4月24日、朝来市大蔵市民会館にて竹柏会「心の花」主催「しろはつたんの里歌会」開催。講師、大野道夫氏。(足立勝歳)

【淡路】10月25日、洲本図書館まつりで「ふれあい短歌教室」実施。新人発掘を願い今年も開催。ジュニアから家族、高齢者まで13名参加。スタッフ8名。創作意見交換、添削指導など大好評。▼11月、年刊歌集「給水塔」第41輯刊行。一人30首、11名参加。代表片山田佳子氏。▼12月、千鳥短歌会歌集「ちどり」20号刊行。一人10首18名参加。代表山田恵子氏。▼3月、淡路歌人クラブ「年刊歌集」第3号刊行。69名参加。第34回全

とべら

(月刊)

代表者 尼子 勝義
 発行所 赤穂短歌の会とべら発行所
 〒678-0163 赤穂市高雄1876-1
 尼子方
 ☎(0791)48-0137

茅花短歌会

短歌文学の鑑賞と作歌についての研修を行い、清新自由で個性にちじた作歌を目指します
 毎月第二水曜日九時よりふれあい交流館で勉強会
 隔月に茅花誌を発刊

講師 沼田 俊郎
 代表 前田 昭子
 〒675-1113 加古郡稲美町岡一六三〇
 TEL ○七九 四九二 一七六六
 FAX ○七九 四九二 一七六六

淡路短歌祭、ジュニアも含む入賞作品13首掲載。代表清水昭男氏。(来田 務)

お詫び 前号194号、7ページ中段14行目「七・八・六・九・七の37音に」と「この1首が」の間に句読点「。」が抜けていましたことをお詫びいたします。

西宮歌人協会

会長 井上 美地 ☎(0798)72-0214
 委員 益永 典子 芝洲田 鶴子 高橋 武雄
 河村 公美 伊藤 千寿子 黒坂 孟弘
 桂 功三 小林 幹也 渋谷 恭子

会歌 毎月第3水曜 13時より中央公民館
 連絡先 伊藤千寿子 ☎(0798)64-1301
 歌会 毎月第2月曜 13時より 夙川公民館
 連絡先 橋 礼子 ☎(0798)71-1284
 歌会 毎月第4木曜 13時より 越木岩公民館
 連絡先 嶺山 武子 ☎(0798)70-7721

津ぶら

代表 兎田 孝子
 編集員 達 洋子
 阿部ツヤ子

発行所 尼崎市常松一 一九二九
 〒661-0046
 TEL (06)6433-1553
 FAX (06)6433-1553
 松村 和子

恒屋川短歌会

生田みのり 大塚 好子
 大西 豊子 清瀬 輝代
 竹川たづる 出来佐恵子
 永瀬たつ子 羽岡きよ子

代表 竹川たづる
 会計 生田みのり
 連絡先 〒679-2121 姫路市豊富町神谷一〇二二
 ☎(079)264-1311

水甕姫路

隔月刊「ひめぢ水甕」編集室

編集委員
生田よしえ 小松カツ子
藤本 則子 楊井佳代子

会計 安田 玲子
〒679-2131 姫路市香寺町犬飼366
☎079-232-2380 小畑 庸子方

姫路歌人クラブ

事務所
〒671-2224 姫路市青山西四丁目五一六
西村 久代方
☎(〇七九)二六七二二六七

顧問 安井 一美 水野 美子
代表 楠田 立身
副代表 小松カツ子
会計 内海 永子 飯田 進
会計監査 青田 綾子 新冢イサ子
首藤 幸子

西脇短歌会

会長 藤原 孝雄
副会長 藤中 光代
〃 藤本 勝子(事務局)
会計 杉岡 静依

事務局
〒677-0043 西脇市下戸田578
藤本 勝子
☎(0795)23-2377

旅 笛

歌は人生の旅路に携える一管の笛

編集 角倉 羊子
黒崎由起子
小笠原明子

旅笛の会
〒178-0064 東京都練馬区南大泉2-23-8 梅村方
角倉 羊子
〒651-0052 神戸市中央区中島通1-1-25-102
黒崎由起子

文学園

創刊昭和21年

代表 下村 千里
集人 青田 綾子
発行 浮田 伸子
発行所 〒651-2276
神戸市西区春日台1-8-1 浮田方
☎(078)961-5676

編集委員 内山 嗣隆・岸本 寿代
宮脇 経子・山本 圭子
山本 君子・吉田千代美
会計 吉永久美子

白圭

編集委員
塩澤 川上 鎌谷 内海
首藤 幸子 文子 鶴子 永子

発行所
〒679-4003 たつの市揖西町小神297-1
内海 永子方
白圭社
☎(0791)63-4734

林間阪神支社

伊藤佐重子・石黒 陽子
内井 幸子・加地 令明
倉橋 愛子・芝淵田鶴子
寺嶋 雅子・平木美智子
南 操子・吉村すゑ子

〒662-0844 西宮市川添町一四一
芝淵田鶴子方
☎(〇七九八)三六一一九〇七

ポトナム姫路支部

(姫路) 西門 和子
(佐用) 新冢イサ子

連絡先
〒671-2247 姫路市緑台1-7-1
羅川 範子

波濤神戸

発行人 保田ひで
発行所 波濤神戸支部
連絡先 〒653-0852
神戸市長田区山下町1-5-15
保田 方
☎(078)612-9294

尾末 富岡 田 三好 保田
幸子 経子 知子 好弥 寿子 ひで

玲 瓏

[玲瓏の會]

塚本邦雄詩歌アカデミア迫真的想像力の
飛翔を期するサンボリスムの殿堂

呈送稿要領見本誌
御希望の方は
〒262-0026 千葉市花見川区瑞穂2丁目1-1
ガーデンプラザ新検見川2-906
塚本 青史方
Tel/Fax 043-211-6704
http://reir.blue.coocan.jp

美加志保短歌会

創刊 昭和二十一年十二月

〒673-1423 加東市東古瀬七六一一
編集兼発行人 内藤 晴樹
☎(〇七九五)四二二二三二

東浦短歌会

代表 片山 田佳子
毎月 第2木曜日 13時30分～
歌会
東浦老人福祉センターにて
会費 月 千 円

連絡先
〒656-2311 淡路市久留麻2346-6
片山 田佳子
☎(0799)74-2141

昭和八年創刊 六 甲

代表 田 岡 弘 子
発行 明石市太寺四一三〇
顧問 志 方 弘 子
編集委員 竹 本 美 屋 子
石原 智秋 牧野 秀子
青山 俊代 黒川 明子
村瀬 美雪 阿部 明子
加藤 容子 小島 和子
西村 紀子 小 田 弥 生

水甕明石支社

左記で、毎月歌会を開いています
お気軽にご参加下さい

◆第一土曜日 午後二時より
◆場所 神戸医療生活協同組合
生協会館
◆連絡先 池本 俊六
〒651-2233 神戸市西区樫谷町福谷
六六八一
☎(〇七八)九九一〇一五五

東加古川短歌会

水野 美子

郡 英子 小西 春見 佐藤 咲子
新屋 修一 須鎗みち子 谷村 孝子
福山 祥子 水野 美子 矢内 温代

兵庫県歌人クラブ 年刊歌集第五十六集作品募集案内

作品 十首(過去一年間の自作、既発表・未発表問わず)・題を付す
様式 四百字詰め原稿用紙(A4判)二枚を用い、楷書で明記(右肩を綴じる
一行目に①題名 ②氏名(題名の下に書き、必ず「ふりがな」を付す)
二行目はあけ、三行目から③作品十首 ④二枚目末尾に所属結社
または団体名・郵便番号・住所・電話番号を明記

かな遣い 新・旧いづれかに統一し、歌稿右肩欄外に新・旧の別を明記

参加料 三千元(歌稿に同封して送金(切手代用不可))

資格 問わない(会員・非会員の別なく誰でも参加できる)

締切 二〇一六年八月二〇日(当日消印有効)

送付先 千六五八―一〇〇二七 神戸市東灘区青木二―二―一―六一七
三津野幸代方
兵庫県歌人クラブ年刊歌集刊行委員会まで

電話〇七八―四三一―八六六五

伝統文化体験フェスティバル

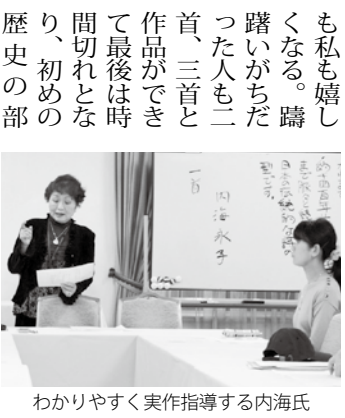
平成28年3月5・6日、兵庫県公館

鋭い時事詠も出て

内海永子

まだ肌寒い三月五日、兵庫県公館にて開催された「伝統文化体験フェスティバル」の短歌コーナーで参加者を待つ。こういう時、他の講座に比してなかなか人集まってもらえないのが残念。とは言え、大人四人、子供二人の申し込みがありほっとする。

講座では、まず短歌の歴史について話した後、早速実作してもらうことに。大人四人のうち一人はかなり実作経験のある人らしく、初めから鋭い時事詠を出され驚く。他の三人も率直な自分の想いを詠まれて、少し手直しさせてもらうと良い歌になり、作者ともど



わかりやすく実作指導する内海氏

私も嬉しくなる。躊躇いがちだった人も二首、三首と作品ができて最後は時間切れとなり、初めの歴史の部分をもう少し短くすればよかったと反省。それとせつかく来てくれた小学生二人にうまく対応出来なかった事も反省。翌日講師の武富氏をはじめ歌人クラブ諸氏のサポートに感謝しつつ何とか無事に役目を終える事が出来た。
初心者に伝えたかったこと 武富純一
用意した資料を元に前半で短歌の概

平成27年度収支決算報告書

自 平成27年4月1日～至 平成28年3月31日

Table with 3 columns: 費目 (Expense Item), 金額 (Amount), 摘要 (Remarks). It lists various financial items like membership fees, advertising costs, and grants, totaling 3,250,364 yen.

Table with 3 columns: 費目 (Expense Item), 金額 (Amount), 摘要 (Remarks). It lists various expenses like total contributions, membership fees, and administrative costs, totaling 3,250,364 yen.

上記の通り相違ありません 平成28年3月31日 会計 福島 妙子 監査 兼井 靖行

要、後半で実作指導をしました。

短歌千四百年の歴史を半時間そこで語るのは至難の業でしたが、「啄木は月末になるたびに歌がたくさんできた。その理由は、借金取りからの逃避」などのエピソードに脱線しつつ、万葉集から現代短歌までの秀歌を解説しました。

おもしろかったのは穴埋め問題。

「〇〇の切符を買へば途中にて死なぬ気のすることのふしぎさ(斎藤史)」。つまり、どんな切符を買えば「途中



歌を評する武富氏

にて死なぬ気のする」となるか：を想像する問題で、答えは「往復」なのですが「海行き」「高額」「特急」の他、「温泉」というユニークな意見が次々に。短歌は言葉ひとつ変われば歌意も変わるの、言葉から受けるイメージを繋いで想像力で読む：そんな狙いのもりでしたが、手応えがしつかりあったのでほっとしました。

お陰さまで二日間とも大盛況、全首を評するのに充分な時間がとれないほど予想外に多くの歌が集まりました。短歌初心者に何をどう言えば理解していただけるかを考えさせられ、とても勉強になった二日間でした。

◆余滴◆ 皆さまのご協力感謝しています。大地震に遭われた熊本の日も早い復興を祈りつつ…。 (森嶋郁子)